

＜特集＞高山博教授退職記念インタビュー

2022年3月7日、東京大学文学部西洋史学研究室で長年教授を務められてきた高山博氏の退職を記念し、『クリオ』編集部にて同氏にオンラインインタビューを行った。インタビューでは、中世シチリア史を主な専門とし国際的に活躍されてきた高山氏の学生時代やこれまでの研究活動について伺ったほか、今後の研究の展望、西洋史の研究界の将来などが話題となった。司会は編集委員かつ同研究室の博士課程に所属する奥田が務めた。また当日は編集委員・同所属の山口および、高山氏の中世史ゼミ生など学生数名が出席し、終始和やかな雰囲気での会談であった。

学生時代・趣味

奥田：高山先生、本当にお忙しいところ今日はありがとうございます。今日はいろいろお話をお伺いできればと思います。まず自己紹介なんですけれども、西洋史学研究室博士1年の奥田と申します。専門は20世紀初頭を中心にハプスブルク帝国のムスリムについて研究しています。今日はよろしくお願いします。

高山：はい、僕と時代は違うけれど、同じような関心を持っていますね。

奥田：はい、それで自分の問題関心がすごく近いところがあって、学部の際に卒論のテーマを選ぶときに高山先生の本もかなり読みました。

高山：ありがとう。

奥田：はじめに『クリオ』編集部からの質問にお答えいただければと思います。まずは先生の学生時代、研究状況の変化についてお聞きしたいのですが、西洋史学研究室に進学された理由は何か、また他に進学振り分け（注：現在は進学選択）で進学を考えられていた研究室はありましたか。

高山：その質問に答える前にまずは僕の関心について話した方がいいですね。僕は駒場では文科三類に属していましたが、専門を決めるときにヨーロッパとイスラーム世界との交流史が頭にありました。イスラームについてはよくわからないけれど、アラビアンナイトのイメージや、イスラームの美術や文学に惹かれていて、でもそこに無条件に飛び込むのはちょっと怖い、外れたら大変だなという思いがありました。またヨーロッパの中世も面白そうでしたから、両方をやれる、交流というテーマをやりたいなと思いました。そして、東洋史にするか西洋史にするかで悩んでいました。だから奥田さんに近い状況だったんじゃないかな。

奥田：すごくよくわかります。僕、実は西洋史学研究室には転専修で入ってきて、初めは東洋史でオスマン史をやろうと考えていました。もともと西側の方に興味はあったんです。進振りのときも東洋史にするか西洋史にするかで、本当に本当に悩んだため大変共感します。

高山：そうそう。それで僕が西洋史を選んだ理由は、西洋史のほうがなんとなく明るそうだったから、それだけでした。東洋史に行っても西洋史に行っても、どっちでやってもよかったです。東洋史に行ったらイスラム一筋！とか、もしくは東洋史にべったりになりそうな雰囲気は当時は感じました。その点、西洋史の方がよりいい加減というのか、優柔不断という言い方は変ですが、割と自由にやれそうな雰囲気があったから進学したのだと思います。

奥田：なるほど、ありがとうございます。自分が進学先の研究室を選ぶうえで悩んだ点と先生のお話がすごく重なって、大変興味深く聞かせていただきました。もう少しその学生時代のことについてお伺いしたいんですけども、学部時代、何かサークルとやアルバイトはされていましたか？

高山：サークルは書道研究会に所属していました。欧陽詢（おうようじゅん）¹という書家がいるんですが、いわゆる楷書の、お手本になるような作風なんです。この欧陽詢が書いた九成宮醴泉銘（きゅうせいきゅうれいせんのめい）を真似て駒場祭で展示したりしました。駒場時代ほとんど書道研究会の仲間たちと遊んでましたね。

奥田：書道は昔からずっとされていたんですか？

高山：いや、そうではなくて。字が下手だから、きれいな字をちゃんと書けるようになりたいと思ったんです。そのためには楷書がいいんじゃないかっていうことで、欧陽詢の九成宮醴泉銘を選びました。

アルバイトは家庭教師をやっていました。家庭教師が一番実入りがよかったので、それをずっと大学院生になってからも続けていました。あと塾の講師も学部の時に始めたのかな、いや、大学院に入ってからかもしれない。このあたりがもう定かじゃなくなりましたが、館山数英塾という塾が水道橋にあって、そこでずっと教えていました。

奥田：ちょっと野暮なこと聞くようなんですが、アルバイトで稼がれたお金っていうのは何に使われていましたか？

高山：ほとんど本に使っていました。学部生の時も大学院生の時も奨学金をもらっていましたが、それでは全然足りないから、アルバイトで稼いだお金を使っていました。

奥田：本というと、池袋の古本屋で研究テーマを選ぶきっかけになる本と運命的な出会いをされたということを以前書かれていたと思うのですが、それもそうした趣味の中で見つかったのでしょうか。

高山：当時は本屋がいっぱいあったんですね。神保町にはもう本当にたくさん古本屋がありました。僕が池袋で買った飯塚浩二先生の本は²、古本ではなく新刊でした。新刊本を売っている巨大な本屋で購入しました。僕らの時代は、そういう大きな本屋がいっぱいありました。大学の帰りに、ほとんど毎日どこかの本屋に立ち寄っていました。大きな本屋には膨大な数の本が並んでいる、良い時代でしたね。当時は今と違って歴史関係の本もすごく多く、そこで『東洋史と西洋史とのあいだ』というおもしろそうな本

¹ 欧陽詢 (557-641)：唐代三大家の一人で、楷書で名高い。「九成宮醴泉銘」は彼の代表作の一つ。

² 飯塚浩二『東洋史と西洋史とのあいだ』岩波書店、1963年。

を見つけたんです。

奥田：ありがとうございます。そしてもう少し学部時代の話なんですけれども、学部時代に受けた授業で、特に印象に残った授業はありますか？

高山：印象に残っているのは、演習です。古代史の伊藤貞男先生。中世イギリス史の城戸毅先生。それから中世史の樺山紘一先生。僕以外は今の先生たちもそうだけど、演習というのは基本的に外国語文献講読でした。伊藤先生と城戸先生の授業は英語の論文、樺山先生の授業はフランス語の文献を読んでいました。僕は第外国語が中国語だったから、フランス語の文法を勉強しながら、樺山先生の授業に出ていました。大変だったので、それはすごく記憶に残っています。

一方で樺山先生の演習では授業以外のところでいろんなゼミ生との交流がありました。頻繁にみんなで一緒に喫茶店へ行ったり、コンパをやったり、先生のお宅に行ったりして、仲良く楽しいゼミ生活を送ってたんじゃないかなと思います。それがすごく印象に残っていますね。

奥田：ありがとうございます。授業を超えた繋がりがあってというのはすごくいい時代だなと、すごく羨ましいなあと思いました。

高山：そうそう、すごく良かったです。樺山先生はお酒が好きだったから、わりと頻繁にコンパにつきあっていただき、居酒屋でも飲んでいました。それから、先生のお宅にもしばしば呼んでくださって。そこで大勢のゼミ生たちがぎゅうぎゅう詰めで飲んでいました。

奥田：なるほど。先生がゼミの最終回の時の懇親会を先生のお宅に招かれて行われているというのも、その影響があるのでしょうか。

高山：それもあつと思います。また、自分の父親が小学校の先生で、よく自宅に、教え子たちを、小学生だけじゃなくOB・OGも連れてきていたものですから、学校の先生はそういうものだというイメージもありました。樺山先生のお宅に呼ばれただけでなく、城戸先生のお宅にも学期の終わりとかに呼んでいただきました。あと大学院では、木村尚三郎先生が赤坂のマンションに自分の部屋を持っておられて、そこに呼んでくださった。そこで初めて、僕はブルーチーズの味を覚えました。ワインは樺山先生とも一緒に飲んでたけれど、木村先生のところでは、授業の外で、フランス文化、当時の食文化とか音楽とかそういうものを学んだと思います。最初、ブルーチーズが出てきた時は仰天して、なんでカビの生えたチーズを食べるんだろうと思いましたが、病みつきになってしまって今は大好きです。そういうこともあって僕自身もコンパを積極的にやったり、自宅にも割と頻繁に学生たちに来てもらいました。

また駒場でも1年生の教養のゼミを29年間ずっと休まずに開いてきましたし、加えて本郷の学部ゼミ・大学院のゼミもありましたから、学期の終わりには3組それぞれコンパを開いていました。新型コロナウイルスの感染拡大が始まってからはできなくなりましたが、基本的には学期の終わりやクリスマスに自宅に呼んでいました。

奥田：なるほど。クリスマスの時も呼ばれるんですね。

高山：そうそう。新型コロナウイルスの感染拡大以後まったくやってないので忘れかけてい

たけれども……。教養学部の学生たちにはアルコールを出せないからちょっと大変なんですけれど、本郷の学生たちはもうお酒が飲めますからワインを出して……。自宅でちょっと飲んでお話をする。で、その後にレストランに行つてというパターンができていました。世代によっては、最後にカラオケに行くということもありましたね。

奥田：そのカラオケには先生もご一緒されることはあるんですか？

高山：そうです。僕も一緒に行きました。

奥田：僕も友達から聞いただけで詳しくは知らないんですけども、X JAPAN が好きだとお伺いしました。十八番などもありますか。

高山：X JAPAN は好きですね。歌うのは「Forever Love」です。

今回参加している中世史の院生たちはみんな知ってるけれど、僕のレパトリー・リストっていうのがあって……。(高山先生がタイプ打ちされたお手製のレパトリー・リストを見せる)

奥田：あ、すごい、すごいですね。

高山：そう、みんなに見せているんだけど、分厚くて、22 頁ありますね。

奥田：レパトリー・リストまでまとめられるっていうのはすごいですね。しかもすごく丁寧にタイプ打ちされててすごいなと思いました。

高山：ありがとうございます。このリストは僕のこのパソコンに入っていて、改定しながら今に至っています。

奥田：ああ、すごいですね。

高山：1 番新しいのは、……。これはまだ改訂されないけれど、「炎」(ほむら) かな。「炎」って知ってる？

奥田：山口さんご存知ですか？

山口：あれですかね。あの『鬼滅の刃』の映画の主題歌の。

高山：そうだよ。LiSA の曲です。

山口：すごい、私より全然今どきです

高山：ありがとうございます。これが最新で、2020 年のものですね。

奥田：ごめんなさい、あまりにも現代的過ぎて、どの「炎」かちょっと結びつかなくて。知ってます、僕もよく知ってます。

高山：そうだよね。「炎」とかね、新しいのでは「紅蓮華」(2019 年) も入ってるけれど……。あと Uru の「あなたがいることで」(2020 年) とか。それから King Gnu の「白日」(2019 年) とか、新しいところでもちゃんと改定しています。あいみよんの「ハレノヒ」(2019 年)、「マリーゴールド」(2018 年) も入っています。

奥田：すごいですね。いや、なんか一瞬あまりにも現代的過ぎて結びつかなくて。なんかそんなに最近のまであのカバーされてるなんて。あいみよんとかも入ってるんですね。

高山：年配の方たちとカラオケへ行くときは古いのを歌いますが……。一番古いのだとサイモン&ガーファンクルとかね。知ってますよね？サイモン&ガーファンクルの

「サウンド・オブ・サイレンス」とか「スカボロー・フェア」とか。まだみんな生まれてない1965年だから知らないかな。

奥田：すごいですね。ずっと随時更新されてて。

高山：僕にカラオケの話をさせると止まらなくなりますね（笑）。学生は知ってる世代と知らない世代とがあると思いますが、ある時期から一緒にカラオケに行くようになりました。山口さんや柴田君は知ってるでしょう。2人とも一緒に行ったと思いますけれど・・・。

山口：いえ、なぜだったか忘れてしまったのですが、私は行けなかった記憶があります。先生の歌を聴かぬまま3月になってしまったのが今すごく悔しいです。

高山：それは残念ですね。

柴田：僕の1つ2つ次の学年くらいが最後じゃないでしょうか。先生がかなりお忙しくなって、学期末にいろんなものが重なるようになったのが増えてきたと思うんですよ。

高山：ああ、そうですか。多分内川君が1番多いよね？

内川：僕が1番ご一緒してるかと思います。

高山：ああ、そうだ。内川君がコンパの幹事やってる時は大体カラオケに行ってたよね。

内川：僕もカラオケ好きなので。

高山：そのときはわりと頻繁に行っていました。やっぱり、コンパの幹事が行こうって言わないと、なかなか行けませんからね。

柴田：ああ、そうだったんですか。

高山：僕も自分から誘うことはないから、内川くんがいなくなってから、行く機会が減ったんじゃないかな？駒場の学生は、そこをおそらく付度して、僕がカラオケ好きだったことを知ってたから、コンパの最後にカラオケを入れていました。新型コロナウイルス感染拡大後も、3度、オンライン・カラオケ会をやりましたよ。

奥田：えっ、オンラインでカラオケですか？1人ずつ部屋を予約して、何かそれをオンラインに繋ぐとかでしょうか？

高山：僕は自宅から参加します。カラオケボックスで参加する子が、一人だけいましたけれど、あとのみんなは自宅でした。

柴田：みんなで、1人カラオケを一緒にするみたいな感じですね。

高山：そうですね。でもね、結構それなりに楽しめましたよ。YouTubeにカラオケ練習用の音源があるからそれをオンラインで共有して、誰か1人が歌うっていう・・・。まあもちろん2人で歌うことも可能ですが、基本的には、1人ずつ順番に歌って行って・・・。交代しながら歌って、結構盛り上がりました。

奥田：それは楽しそうですね。

高山：うん。みんなやっぱりフラストレーションがたまってたんでしょうね。最初は、オンライン・カラオケって、どうやってよいかも分からなかったんですけど、オンラインカラオケの話をしたら学生たちがすごく乗り気になっていろいろ調べてくれたんです。1度やったら上手くいったので、そのあと2度、3度とやることになりました。まあ、カ

ラオケの話はこれぐらいにして、次の話題へ進みましょう。

子供時代の夢・卒業論文・修士論文と研究テーマとの出会い

奥田：すみません。興味深いところで、つつい色々聞いてしまいました。では次の質問に移らせていただきます。研究者を目指す前には、何か別の将来の夢はありましたか？

高山：大学院生の中には知ってる人もいますが、僕は基本的に理系の人間だったんです。小学生の頃はね、天文学者になりたかった。祖父のところで、科学事典を見せられた時に、星雲やプレアデス星団の白黒写真を見て感動し小学生のときに自分のお小遣いで『原色現代科学大事典』（学研、1968年）の第1巻「宇宙」を買って夢中で読んでました。その時はもうカラー写真が載っていましたが、宇宙の構造や、どうやって宇宙ができたかをわくわくしながら読み、考えていました。その頃は、自分は天文学者になるって固く心に決めていたんです。福岡の田舎に住んでいましたから、夜は星が綺麗に見えるので、望遠鏡も買いました。小学生のときには、星雲番号や星雲の形、場所、星座などをよく覚えていました。当時は天文学者になりたいと思っていて、その後は宇宙飛行士、天体物理学の専門家になりたいと思い、京都大学の理学部に行くことを考えていました。偉人の伝記も良く読みました。父が、少年少女文学全集みたいな、伝記が入っているシリーズものを買ってくれたんですね。そこで野口英世とかパストゥールとか、牧野富太郎とかニュートンとかアインシュタインとか、ほとんど科学者なんですけれど、彼らの伝記を読んで、自分は大きくなったら科学者になるんだと、小学生の頃は思っていました。そういう理系の少年だったんです。

奥田：そうだったんですね。少し飛びますが、学部・修士の頃の研究についてもお伺いしたいのですが、卒業論文や修士論文のテーマ・内容について、覚えていらっしゃる範囲で教えていただければと思います。

高山：学部で提出した卒業論文のタイトルは、確か「中世シチリアにおけるノルマン支配下のムスリム」だったような気がします。ヨーロッパとイスラムの交流を勉強するにあたって、どこがいいかなといろいろ調べました。中世のスペインとシチリアが候補になったんですが、後者の方が研究者もあまりいなくて面白そうだったので、シチリアにしたんです。北方のノルマン人が作った王国にイスラム教徒が住んでいるという、ヨーロッパとイスラムの絶妙なコンビネーションだったので、「中世シチリアにおけるノルマン支配下のムスリム」を卒業論文のテーマにしたと思うんです。勉強を始めたら本当に面白くて、すぐ魅了されました。当時は日本語の研究がほとんどなかったのですが、飯塚浩二先生がご著書で Charles Diehl³ というフランスのビザンチニストが書いたものを紹介していて、ワクワクしながらそれを読みました。その本の中にノルマン支配下のシチリアの事が書いてあったんです。日本語での先行研究がほとんどなかったので英語の本を本郷の図書館で探したんですが、概説のようなものしか見つ

³ Charles Diehl(1859-1944)：ビザンツを専門とする歴史家・考古学者。ストラスブールに生まれ、パリでビザンツ史学の教鞭をとった。

りませんでした。ただ文献を調べるなかで、色んなことが分かってきました。例えば Michele Amari⁴というイタリア人のアラビストが『シチリアのムスリムの歴史』という本を出しているということや、シチリアに残っているアラビア語史料をまとめた書物もあるということがわかりました。さらに、フランスで出ている *Journal Asiatique* という雑誌にアマーリの論文が入っていることがわかりました。この雑誌は、国会図書館にありましたが、もともとは満州鉄道の研究所の所有物でした。満州鉄道が貴重な古い雑誌や本を多く持っていて、それが国会図書館に入っていたんですね。アラビア語も勉強していたけれど、当時はアラビア語の原史料を一人で読むのはちょっと自信がなかったので、イタリア語やフランス語に訳されたものを最初に読んで、必要な部分のアラビア語テキストを精読するというやり方で、ノルマン支配下のムスリムの状況を卒論にまとめました。この勉強が面白かったので、大学院の入学試験を受けることにしました。当時は大学院入学試験に合格するのは非常に難しかったのですが、運よく合格できました。その年の合格者は、私を含めて3人でした。一人は上の学年の人で、もう一人は同期の甚野尚志君でした。甚野君は、駒場の教養学部にも勤めてから、早稲田で中世史を教えています。

奥田：ええ、そうなんですね。何人受けていましたか？

高山：どれくらいだったかな？ 30名くらいだったかな。

奥田：考えられないようなすごい時代です。

高山：考えられないですよ。当時は大学院に入ればほぼどこかの大学に就職できるというようなシステムだったんだと思います。大学院修士課程の合格者数を絞っていて、大学院に合格した人たちは大体どこかの大学の先生になれていたように思います。そのようなシステムがその後変わって、大学院修士課程への合格者数を増やし、博士課程進学時に絞るようになりました。私たちのときは、大学院を目指して留年している人たちもかなりいましたので受験者の数が多かったんですね。

大学院に合格した後、樺山先生に呼ばれて、「この程度の論文では博士課程に進学できません。世界水準のもので無いと駄目です。」と言われました。その当時、世界水準なんて全然わからなかったし、意識もしていなかったから、世界水準の研究するにはどうしたらよいか、世界水準の論文を書くにはどうしたらよいかということを僕なりに一所懸命考えました。そして修士論文のテーマは「ノルマン・シチリア王国の財務行政機構」にしました。このテーマについては長い論争の歴史があって、世界中の研究者がいろんな説を出していましたから、その論争に参加すれば、きっと世界水準の研究になるのではないかと思ったんですね。修士論文ではアラビア語の原史料、ギリシャ語の原史料、ラテン語の原史料を分析して、自分の見解を提示することができたと思っています。

⁴ Michele Amari (1806-1889): シチリア島で生まれ、中世シチリアにおけるイスラーム研究の開拓者。42年から60年はパリへ亡命しアラブ学を学ぶ。かつてはシチリア・ナショナリストでもあったが、のちにリソルジメント運動に転向した。インタビューで言及された本は以下：M. Amari, *Storia dei musulmani di Sicilia*, 3 vols., Felice Le Monnier, Firenze, 1854-1872.

奥田：なるほど、ありがとうございます。今の経緯は『ハード・アカデミズムの時代』⁵にも結構書いてらっしゃるところなんですけど、こんな背景があったのかと興味深く聞かせていただきました。次はいささか野暮な質問かもしれないんですけど、修士と博士時代の学費と生活費はどうされていたのかお伺いしてもよろしいでしょうか。

高山：はい、これは既に少し触れましたが、基本的には奨学金とそれから塾講師のアルバイトでした。塾講師のアルバイト代でかなりの収入を得ていました。夏休みに夏期講習をやると、くたくたに疲れますが、まとまった収入になりました。そういえば、塾の経営者から、「理科三類を志望している優秀な生徒がいるんだが、国語の成績が悪いから今の成績では無理だ。何とかしてくれないか。」と頼まれて、国語の個人指導を引き受けたことがあります。塾と本人の親が半分ずつ費用を負担してくれたので、通常の倍くらいの時給をいただきましたが、生徒の国語の成績は急速に上がって理科三類に合格することができました。

奥田：いや、すごいですね。

高山：それで、塾の講師や家庭教師で得たお金はほとんどが本に消えていきました。当時は大きな本屋がたくさんあったし面白そうな本もいっぱいあったから、本屋にいくとついつい買ってしまいました。専門書は高いですから、塾講師として稼いだ金はすぐなくなっていました。もちろん、授業料や生活費が足りなくなれば、本の購入費用をおさえればいいだけのことで、皆さんよりはずいぶん、ある意味で自由な生活を送っていたんじゃないかなと思います。塾で教える時間は大変ですけど、普通のバイトと比べたらずっと時給はよかったですから。

奥田：なるほど。詳細にありがとうございました。

高山：なんかどンドン脱線してしまいますね（笑）。

奥田：いえいえ、こういうお話しこそなかなか聞けないことというか。

アメリカへの留学・国内にとどまらない研究活動とその苦労・昨今の学界状況

奥田：それで次は留学中の生活についてお伺いしたいんですけど、昨今では以前より留学する学生が増えていると思います。先生が留学された当時はどうのような状況だったのかということをお伺いしてもよろしいでしょうか。

高山：当時は、留学する人はあまりいませんでした。西洋中世史で欧米に長期留学する人なんてもうほとんど皆無だったと思います。留学している人のほとんどが短期で、1年以内というのが普通でした。ずっと以前には城戸先生が留学されているけれど、おそらくそういうかなり前の頃を除けば、東大の中世史の中では、僕が学位を取るために長期で留学した最初の例の一人じゃないかなと思います。もちろん、その後、どんどん増えていきましたが、当時は、留学のための奨学金は殆どありませんでした。近現代をやっている人は中世よりは留学する人が多かったんじゃないかと思うけれど、それで

⁵ 高山博『ハード・アカデミズムの時代』講談社、1998年。

もやっぱ大変だったと思います。当時あったのは、基本的に、国費留学。イギリスの場合、British Council。ドイツはDAAD (Deutscher Akademischer Austauschdienst)で、イタリアは国費留学、フランスも国費留学だったのかな。いずれにしろ、狭き門で僅かしかない枠に受験者が殺到していて、それを通過できれば留学ができるといった感じだったと思います。あとはもう、それこそ日本育英会などの奨学金をコツコツ貯めたり、アルバイトの収入を貯めて、それを滞在費用に充てて最初は短期で行くという流れでした。でもまあ、イタリアやドイツ、フランスは授業料がほとんどかからなかったと思うから、生活費が確保できればなんとか留学できたという状況だったんだと思います。

そういう中で僕の場合は、城戸先生から高山君はアメリカに行きなさいってずっと言われていました。なかなかアクションを起こさない私に先生がしびれを切らしたのか、ハーバード・エンチン研究所の奨学金があるから、それを受けてみなさいと言われてました。これはDoctoral scholarship for Junior Faculty というもので、基本的には、アジアの大学の教員で博士号を取得していない人が、アメリカで博士号を取得できるようにするための奨学金でした。元々大学院生は受験できなかったのですが、城戸先生が当時のハーバード・エンチン研究所の所長と知り合いで、かけあってくれたんですね。「博士の学位取得のために4年や5年、勤めている大学を休ませてくれるような大学は日本にはないから、日本の教員で応募できる人はほとんどいない。だから、大学院生にも応募させてくれないだろうか。」とおっしゃってくださって、それで、私の申請が認められることになったんですね。奨学金の対象はハーバード、エール、プリンストン合格者のみでした。私は、この3つとUCLA (University of California, Los Angeles) に申請し、エールとUCLAにそれぞれの大学の奨学金付きで合格しましたが、ハーバード・エンチン研究所の奨学金でエール大学大学院に入学することになりました。授業料と配偶者の生活費を含む奨学金を4年間いただけたので、2人で普通に生活することができました。

ところで、事前にいただいた質問には、食生活についても聞きたいとありましたけれど、1年目の大学院寮食堂の食事はおいしくありませんでした。

奥田：あ、なるほど、すごくまずかったんですね。

高山：基本的に肉料理とサラダとスープでした。食堂のチケットは結構高くて、1食が千円を超えていたと思いますが、それでもおいしくなかった。だけど、たくさん食べてました。

奥田：そんな中でもしっかり食べられていたんですね。

高山：そうですね。ストレスが強かったから食べていたのかもしれませんが、今から考えれば、太らなかつたのが不思議なくらいです。2年目には妻が来てくれたから寮を出て自炊するようになりましたが、そうすると、お金はかけずに、おいしいものを食べられるようになりました。

奥田：ありがとうございます。次の質問なんですけれども、先生は日本の中世史家という枠にとどまらないで、第一線で研究をされてきました。その中でどのような決意、また苦勞がありましたか？また中世・古代史は、近代史以上に母語や自国史という枠を外れ

て、広い出自の学者が研究に携わっている印象があるんですが、学会の状況は以前と比べて変化してきているのでしょうか？

高山：まず、最初の質問に関してですけれど、大変でしたし、苦勞はいっぱいあったと思います。学生時代の話は『ハード・アカデミズムの時代』にも書きましたが、私たちの時代には欧米で評価されている日本人の先生はそんなにいなかったから、日本人なのにどうしてヨーロッパ中世史を研究しているんだって変な目で見られたり、日本人にまともな研究ができるはずはないというふうに使われたりしました。そういう経験から、基本的には、欧米語で発表したものでしか評価されないのだと思うようになりましたし、重要な論文は欧米語で発表しようと思いましたが、でも、現実問題として、英語だけでやっていけばすむわけではなく、日本語でも論文や本を発表しなければならない。英語で書く方が日本語で書くよりはるかに大変なんですけれど、それでも両方やらなくてはならない。アメリカで生活しているなら、英語で書いたものがそのまま国際的に発表されることになるから、余計なことをしなくてすむかもしれません。

しかし、日本で生活していれば、日本語で書かなくてははいけないし、海外の同僚たちに読んでもらうために欧米語でも書かなくてはならない。学会活動や研究者コミュニティについても、両方にかかわることになります。日本で生活して日本で教育しているわけだから、日本のコミュニティや学会を無視することはできません。雑誌のレフェリーは、国内・国外ともにやってきました。また、国際会議に招待されたときはできるだけ引き受けるよう努めてきました。要するに、いろいろな活動を、二重にしなくてはならない。フランス人だったらフランス語で、ドイツ人だったらドイツ語で発表すれば国外の研究者たちも読んでくれますが、日本人が日本語で論文や書物を書いても存在すら認識してもらえないっていうということですね。

研究者のネットワークについて言えば、アメリカやヨーロッパに住んでいた時には、向こうの研究者コミュニティに容易に入っていましたし、研究者たちとの関係も続きました。しかし、日本に戻ってくるとそれが難しくなってしまう。研究者たちとすぐに会えるわけではないし、頻繁に会うわけでもないの、次第に疎遠になっていきます。欧米学界の現在の動向や、彼らが共有している問題関心を知るのは難しくなりますし、自分の存在も忘れられがちになります。

現在の欧米学会の状況については、欧米の研究者たちの研究者コミュニティは、以前に比べてかなり密になってきたと思います。ぶり返しがあるかもしれませんが、EUの統合の過程で共同研究が増えて、いろんな国籍の研究者がその研究に加わるようになったし、そういう多国籍の研究が評価されるようになりました。フランスとイタリア、ドイツの間での共同研究は増えましたし、EU内での若手研究者の流動性は非常に高くなりました。私個人の経験を紹介すれば、イギリスの大学教授への昇進人事の審査やアメリカの大学教授の採用人事の審査、フランスの大学教授のある機関への推薦状などを依頼されました。おそらく、一つの国の中だけでの評価では不十分だという考えが強くなってきたのだと思います。私の研究領域については、中世シチリア研究や中世地中海研究を行う若い研究者が劇的に増加しました。私が大学院に入って研究者への道を歩き始めた頃、ドイツ、フランス、イギリスにすごい学者はいいましたが、大

部分はイタリア人でした。しかし、その後、それらの国やそれら以外の国も含めて、すごい数の若手研究者が中世シチリア研究や中世地中海研究を行うようになりました。だから、当然、公表される本や論文も増えました。

その国ごとの、ある種の研究者集団内で形成された傾向とか動向といったものはまだ残っていると思いますね。ドイツの研究者たちが持つような関心とか、フランスの研究者たちが持つような関心とか、イタリアの研究者たちがもつような見方とかいうのはまだまだあるように思います。ヨーロッパの中世であれば、今の近代国家の枠組みは本当は無いはずなのに、各国の研究者集団が持っているある種のナショナリティが生きているということなのだと思います。ヨーロッパ中世研究においてもしばしばナショナリズムが顔を出すわけですね。

日常・ある絵との出会い

奥田：大変興味深いご回答ありがとうございました。ちなみに日常生活についてのお話もお伺いしたいんですけども、起床時間や就寝時間など、先生は1日をどのように過ごしていらっしゃいますか。

高山：1日のスケジュールは大体決まっています。朝6時に起きる。そして、就寝は10時を目指しているけれど、実際には11時になったり12時になったりしています。基本的には朝方です。

奥田：ありがとうございます。そこに関係したところなんですけど、一見関係なさそうな生活の一場面と、研究が重なるような場はありましたか？つまり、日常で研究のことを考えていない場面、例えば街を歩いてたり好きな本を読んだりしているときに、「あ、これは自分の研究と関係あるな」と思うものを見つけるなど、何気ない日常生活の一場面が自分の研究内容と結びついて少し変わって見えたりする、というような経験をされたことはありましたか。

高山：そうですね、適切な例とは言えないかもしれないけれど、趣味と研究が交差したエピソードを紹介したいと思います。これは、私の『神秘の中世王国』⁶の表紙（『神秘の中世王国』の表紙を見せる）ですが、この絵はKay Nielsen という1920年代にフランスで活躍したデンマーク出身のイラストレーター作品なんです⁷。僕は20年代のどちらかというとアールデコに近い挿絵やイラストレーションが好きで、パリに住んでいたときはしばしば古書店を訪ねて挿絵の入った古書を探していました。このNielsenの絵と最初に出会ったのは学部学生の頃だったと思いますが、この絵が『週刊FM fan』の表紙に使われていたんですね。正確に言いますと、この絵がリムスキー＝コルサコフの交響組曲《シェヘラザード》のLPレコードのジャケットに使われていて、そのレ

⁶ 高山博『神秘の中世王国』東京大学出版会、1995年。

⁷ Kay Nielsen(1886-1957)：コペンハーゲン生。パリで絵を学び挿絵画家として1910年～20年代に活躍。30年代以降はカリフォルニアにも仕事の拠点を置きこの地で没した。インタビューで言及された作品は以下：Kay Nielsen, *The Arabian Nights*, 1918-1922.

コード・ジャケットが『週刊 FM fan』の表紙を飾っていたわけです。この絵を見て、シェヘラザードが跪いているのは、まるで中世シチリアのノルマン王みたいだと思ったんです。私は、その表紙の絵を切り抜いて、いつか自分が一般読者向けの本を出すときに使おうと考えました。その絵の切り抜きは、その後、アメリカに留学したときも、イギリスにいたときも、私の机のデスクマットの下に挟んでありました。その後、日本と一緒に戻ってきました。このエピソードには後日談があります。『神秘の中世王国』を出版するときに実際に使おうとしたら、ものすごく大変だったんです。

奥田：版権的な問題ですか？

高山：そうです。この絵の現物がどこにあるかも、誰が版権の所有者であるかもわからなかったんです。数か月間調べたけど手がかりすらつかめなかった。出版日が近づき、ほとんど諦めて代わりになる他の絵を検討していた時、UCLAにあるイラストレーションの美術館⁸に版権があることが分かりました。それで、この美術館と連絡を取って、表紙への使用が実現したんです。

この実物を見るのにも苦労した記憶があります。今から13年ほど前の2009年にUCLAに呼んでいただき講演する機会がありました。当時 Kay Nielsen のこの絵を所蔵していた Hammer 美術館を探し回ったのですが、どうしても美術館を見つけることができませんでした。たまたま Department of History の秘書と雑談する機会があって、彼女に事情を説明すると、自分の親友がその美術館で働いているから紹介してあげようと言って、連れていってくれました。こうして、この絵の実物を見ることができました。ところで、この絵は Kay Nielsen が、出版予定だったアラビアンナイトの絵本のために描いたものでした⁹。アラビアンナイトの絵本は結局出版されませんでした。その一連の挿絵だけは後に画集として出版されています。

奥田：そういう裏話がああの本の表紙にあったんですね。

高山：そうです。

教育活動・大学の将来・これからの学生へ

奥田：ありがとうございます。はい。次は教育に関して伺いたいんですけども、自身の研究だけでなく、高山先生は学生の教育も熱心に進められてきましたが、教育の方針で、就任した頃と近年では変わってきたことはありますか？

高山：ええ、教育の方針は変わっていませんが、対応の仕方に変化があったのではないかと思います。最初の頃の学生たちにとって、僕はかなり厳しい教師に見えたのではないかと思います。『ハード・アカデミズムの時代』にも書きましたように、アメリカ

⁸ Grunwald Center for the Graphic Arts, UCLA. 現在は、Hammer Museum, UCLA 所蔵。UCLA に所属する美術館で、1990年 Armand Hammer によって設立された。なおこの美術館の2014年の記事で該当の Nielsen のイラストが閲覧可能である。(https://hammer.ucla.edu/programs-events/2014/06/kay-nielsen)

⁹ Nielsen は『千夜一夜物語』のデンマーク語版の挿絵を作成していたが、該当の図書は彼の存命中には出版されずに終わった。

のエール大学大学院で厳しい授業を受けた時から、東京大学での授業は生ぬるく、まとまりのないものだったと思うようになっていました。ある意味では、東京大学に限らず日本の高等教育に対して強い不満と危機感をもつようになっていたのだと思います。大学でもっとシステムティックな教育を受けていれば自分はずっと先へ行けたんじゃないか、国際競争するためにもっと成長できたんじゃないか、という思いがありました。日本に戻って一橋大学で3年間教えた後、東京大学へ来ましたが、まだ僕も若く、先ほど述べたような思いを強く持っていましたので、迷うことなくエール大学大学院で受けたような授業をすることにしました。宿題は多いし、議論することを強く求めましたので、当時の学生たちにとっては怖い教師だったのではないかと思います。しかし、30年近く教えるなかで、私の学生に対する接し方は変わったように思います。最初の頃は学生の個人的な事情はあまり考慮せず、課題をこなすことを厳しく要求しましたが、途中から、学生一人ひとりがそれぞれ個別の問題を抱えており、一律に強制するのは無理があるんじゃないかと思うようになりました。そして、時には厳しいことを言わなくてはならないけれど、基本的には、できるだけ優しく穏やかに接するようにしました。これは全ての授業で意識的にそうしたように思います。大学院の演習も、学部の演習も、それから駒場の教養課程の演習も、です。だから、何と云うか、授業内容としてはきついかもしれないけれど、僕の学生との接し方が変わったということでしょうね。

奥田：ありがとうございます、もう少しその教育に関することをお伺いさせてください。

『ハード・アカデミズムの時代』は、1998年に出た書籍ですけれども、本書の冒頭で、先生はその当時から20、30年後の最悪のシナリオとして、日本の優秀な高校生たちは欧米の大学を目指すようになって、日本の大学は1/3は廃校、もう1/3は専門学校へ鞍替えして、残り1/3はもうかつての活気はない大学と化してしまう大変厳しい未来を描いていたと思います。今年で2022年を迎えるわけなんですけれども、改めてその冒頭を見返してみるとどう思われるか伺いしてもよろしいですか？

高山：そうですね。もちろん、この本の最後にはもう一つの可能性としてうまくいった場合の話も書いているけれど、残念ながら現実はやっぱ冒頭に書いた方に近づいていると思っています。最近では、例えば開成とか渋谷幕張などの進学校で、東京大学よりもハーバードとかエールとかプリンストンといった海外の有名大学を直接目指す高校生が増えてきたというような記事が割と頻繁に出るようになってきました。そして海外の有名大学を受験するための準備が行われています。僕の駒場の1・2年生のゼミでも、東京大学を辞めて、アメリカとイギリスが多いけれど、海外の大学へ行く例がずっと続いています。多くの人たちは気づいていないかもしれませんが、この動きは実際に進んでいるんですね。それから大学がなくなるということについて、さきほどネットで調べてみたんですが、「日本の私立大学（廃止）」で検索をかけると、38校ありました。日本の公立大学の廃止は33校、日本の国立大学の廃止16校、日本の私立短期大学の廃止10校、日本の公立短期大学は81校、日本の国立短期大学の廃止59校、というデータが掲載されていました。あまり意識されていないかもしれませんが、既に多くの大学が廃校になっています。それから、「日本の大学の統合一覧」というサイ

トもあって、それを見ると統合は2002年から急増して今に至っています。私がネットで検索をかけてこのようなデータが出てきたわけですが、全体の中のどれくらいが廃校になっているのかを含め、データの一つ一つを確認できたわけではありません。ただ、20数年前に危惧していたことが現実にはかなり進行しているという印象をもつてます。

奥田：そうですね。有名校の高校生たちが、どんどんバカロレアとか、海外の大学の受験に特化した教育を受けてるとかって話を聞くと、なんかすごくアクチュアリティというか切迫性がありますね。『ハード・アカデミズムの時代』の冒頭部分は、僕も最初読んだとき、書かれたのが1998年と言うことを信じられず、今のことが書いてある気がしてすごく緊迫感を持って読んだ記憶があります。ありがとうございます。そして次の質問なんですけれども、これからの学生、特に大学院生に目指してほしいことっていうのはありますか？

高山：はい、大学院生に対してはですね、自分の研究者としての位置を、日本ではなく国際的な場で位置付けてほしいと思います。そんなの無理だと思うかもしれませんが、そういう意識をもっていないと、せっかく研究者になった意味が無いんじゃないでしょうか。そのためにできるだけ早く留学してほしいと思います。留学すればそれが現実のものとして受け止められるんじゃないかと思います。日本にだけずっといたら「先生はああ言ってた」と思うだけで、僕が言ってることの意味をまじめに考えず言葉だけが素通りしてしまうんじゃないかな。このことは、海外に留学してそこで研究者としてのトレーニングを受け入れれば、身に染みて感じるんじゃないでしょうか。そういう意味では日本にいる西洋史の研究者の卵たちも二極分化するのではないかと思います。研究者として生きている世界が違うわけですから。これが、私から大学院生たちへのメッセージです。

異文化・アイデンティティ・過去から学ぶ

奥田：ありがとうございます、そうですね。続けて、昨今の状況について質問させていただきます。異文化交流・多様性の尊重といったことがさげばれて久しいですが、いずれも実践するとなると難しい行為だと考えています。中世シチリア王国を研究する先生からみて、宗教、出自などさまざまな基準の「他者」が問題となっている現在の状況をどう思いますか。中世の在り方を安易に理想化するのは避けるべきだとは思いますが、現代と比較することは可能でしょうか。また、中世のあり方から生き方を「学ぶ」という姿勢は可能なのでしょうか。教訓として歴史を学ぶことは可能なのでしょうか。

高山：どこから話し始めたらよいか難しいところですが・・・。まず確認しておく、ここで考えているのはアイデンティティの問題、もっと限定すれば自分が所属する集団とそうではない集団の区別、そして区別された集団を異質なものとして排除する現象についてでしょうか。それとも、そうではなくて、人間の自己認識のメカニズムという話でしょうか。後者であれば話が変わってきますが。

山口：すみません、この質問をした山口です。どちらかというとな前者の方をお聞きしたいと

思っています。

高山：わかりました。後者の自己認識の話になるとまた別の話になりますけど、前者のアイデンティティの問題について答えますね。まず、アイデンティティは重層的ですよ。例えば今、インタビュアーの奥田くんのアイデンティティは、帰属する集団という点から言えば、クリオ編集委員の奥田くん、西洋史学研究室の奥田くん、日本人の奥田くん、と言った具合に色々ある、重層的なものでしょう。個人のアイデンティティがそうであるように、他者も当然重層性を帯びるわけです。現実には、異宗派や異宗教を奉ずる人が他者として自分とは異なるものとして認識されることもあれば、自分の属する集団・団体の構成要素として認識されることもあります。例えば「日本人」という集団を考えてみても、そこには異宗教の人がたくさん含まれています。

では、現在の世界でさまざまな基準の「他者」が問題となっている状況をどう見るのか、という質問に対してですが、自分が属する集団をどのような指標でどのように切り取るかということが問題になっているのだと思います。歴史的に、あるいは、一般的には、特に宗教や言語といった指標が目立つけれど、他者／自分、異なる集団／自分の所属する集団とを区別するには、それらだけでなく多数の指標がある。例えば、保守・リベラルといった価値観でも、集団が切り取られ「彼らはわかってない」とか「彼らのいうことに従えば私たちは破滅する」というような認識をする。さまざまな指標がある中で、現代世界では、普段は意識下にある特定の指標に光が当てられて顕在化する、ということが頻繁におきているのだと言えます。

20世紀の終わりまでは、アイデンティティの重要な指標の一つは近代国家・国民であったといえるかもしれませんが、今はそれが弱まって他の指標が強まったり顕在化したりしている状況だといえます。このような状況は反射的に認識したり、把握したりできるものではありません。一方で、私が研究している中世シチリアを見ると、複数の文化集団が並存していますが、今よりはるかに単純な人間集団やアイデンティティの在り方を捉えることができるように思います。当時のシチリアの状況と比べると、現代世界はそれがはるかに複雑になった状態だと認識することができます。

私は、過去と現在の比較は可能であり、有益だと思っています。もちろん、異なる時代の人間社会を比較するのであれば、それぞれの特徴・相違点を意識しなければなりません。それらを考慮せずに、同じような社会・人間集団として扱えば大きな過ちを犯してしまいます。そのような危険性はあると思いますが、過去と現在を比較するという行為を通して両者の違いが見えてくるのですから、比較は重要だと考えています。

教訓として歴史を学ぶことは可能なのかという問いへの回答もその延長にあります。ある人間集団が置かれている環境・状況・共有されている価値観といったものの違いがわかっていれば、過去に教訓を見出すことは可能なのではないのでしょうか。人間やその集団は、バリエーションはあるけれど、環境が同じであれば同じような思考・反応をして、同じような喜怒哀楽を有するのではないのでしょうか。私の思い込みかもしれませんが、人間の本性は2000～3000年前でも今でもそんなに変わらないのではないのかという気がしています。そうでなければ、私たちは過去の人々に共感できないでしょうから。繰り返しになりますが、対象となる人間集団・社会の特徴や相違点を考慮すれ

ば、教訓として過去を学ぶこと、人間や人間集団の経験として過去を学ぶということは非常に有益だと思います。

「大きな歴史」と実証研究

奥田：興味深いお話をありがとうございます。最近の学界状況についても一つお聞きしたいのですが、最近は気候や環境を含めた「長期持続」的な歴史やグローバル・ヒストリーなど、「大きな歴史」に再び注目が集まっているように思いますが、いずれも方法論を確立するのは難しい印象を受けています。先生は実証的な研究手法を取りつつグローバル化といった広い視点のテーマを早くから議論されてきましたが、上記のような傾向をどうお考えでしょうか。実証研究と、「大きな歴史」は両立できるのでしょうか。

高山：私の経験から言えば、「大きな歴史」と実証研究は別物と考えた方がいいのではないかと思います。実証研究とは、過去の痕跡を調べ、過去の「人間社会」の実際を探り、それを再構成するという作業だといえると思います。あくまで、過去の痕跡があって、そこから過去を調査する。それに対し、「大きな歴史」という言葉で表現されているのは、そういった実証研究をもとにして、「人間社会」の変化、人間集団の動きを認識しようとしている行為だといえます。そのため、もとなる実証研究が変われば、「大きな歴史」も変わることになります。

ただ、これは私自身の問題意識でもあります。 「人間社会」という語を用いて、過去から「人間社会」がこう変化した、と述べる時、この「人間社会」は一体何を指しているのでしょうか。世界史というならば世界とはなんなのか。ヨーロッパというならばそのヨーロッパとは？ フランスは中世から近世でこう変わりました、と述べる時、そのフランスがなんなのか、説明することができるのかと問いたくなります。これは今日公刊される論文集のテーマでもありますが¹⁰、まず、私たちが変化を捉えようとしているのが人間集団であることには変わりはありません。しかし、その人間集団をどうやって同定するのか、どういう集団を捉えようとしているのか？ それに分らなければ、言葉遊びになり机上の空論になってしまいます。そのため、まずその人間集団が何であるのかを捉えて、その集団がどのように変化してきたと認識できるのか、またその集団も常に変化し、分裂・消滅するのが現実であるということを理解する必要があります。自分達が何を見ようとしているのかを限定せずに「社会はこう変わりました」と述べても、結局何の話をしているのかわかりません。集団の捉え方というこの問題は今の私の重要な研究テーマの一つでもあります。この論文集では、人類全体を指しているのか、国家を指しているのか、曖昧なまま議論するのではなく「政治的結合体」という言葉で集団を限定してみようと試みています。従来はあまりそういう問題を考えず「フランス」という言葉を使って、近代国家のようなフランスという国がずっと存在してきたかのように過去を見ていたわけです。これに対する批判が今の私の重要な

¹⁰ 高山博・亀長洋子編『中世ヨーロッパの政治的結合体』東京大学出版会、2022年。インタビュー実施日の2022年3月7日に公刊された。

研究テーマの一つなのですが、次の質問につながってしまいましたね。

奥田：はい、今まさにこれからの研究のテーマについてお聞きしようとしていました。

高山：そうですね。私のこれからの研究テーマですが、第1の研究テーマは「政治的結合体」という枠組みで過去を捉えなおしてみる、そうすることによってこれまでと違った何が見えてくるのか、という問題です。第2の研究テーマは、ここ30年続けてきたことですが、グローバル化という現象をどう解き明かすか、歴史的にどう位置付けるか。そして第3がグローバル・ヒストリーです。これは、第1、第2のテーマと密接にかかわっており、長い間考えてきたテーマですが、何とか書物にまとめることができればと思っています。

参加者からのご質問：大学の外での活動

奥田：長時間にわたり質問にお答えいただきありがとうございます。編集部からの質問は以上なのですが、ここからはご同席いただいている学生の皆様からの質問にお答えいただきたいと思います。

柴田：はい、それでは僕からよろしいでしょうか。『ハード・アカデミズムの時代』は大学院の制度変更に見られるような1990年代の危機感を背景に書かれたものだと思います。おそらくそうした危機感もあって先生は30年かけて学界全体の研究環境を整えてこられました。その中で学会や文科省のお仕事にも携わってこられました。日本での西洋史学の発展についてどのような成果が得られたとお考えですか。

高山：そうですね。色々なことが含まれていますからどこから始めるか迷うところですが……。まず一つは、柴田くんもこれからそうなると思いますが、海外での生活が自分の人生を大きく変えたということですね。学問に対する態度、自分の研究者としての位置づけ、そういったものへの認識が劇的に変わりました。そして帰国後は日本を相対化することになりました。欧米では悔しい思いを沢山経験しましたので、日本に戻って西洋中世史研究者集団の制度的環境をきちんとしたい、海外の研究者たちと渡り合えるように制度を整えるべきだと思いました。自分ができることをやらなければ、日本に戻ってきた意味がないと考えていました。最初に始めたのは研究入門書作りです。欧米には大学生や大学院生向けの多様な入門書・教科書がありました。西洋中世史を学びたいならまずこの研究入門書を読みなさいという具合に紹介される本がありました。しかし、日本にはそういう入門書がまったくありませんでした。1993年に私が最初の著書『中世地中海世界とシチリア王国』¹¹を東京大学出版会から出版した後、担当していただいた編集者に、日本にもきちんとした研究入門書がなければ国内の西洋中世史研究は発展しないと力説し、東京大学出版会から入門書¹²を出すことになりました。親友の池上俊一さんに相談し、6～7年かけて準備することになります。その間に、池上さん経由で名古屋大学出版会から、卒業論文を書く学部学生向けの『西洋中世史研

¹¹ 高山博『中世地中海世界とシチリア王国』東京大学出版会、1993年、560頁。

¹² 高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会、2005年、398頁。

究入門』¹³を出版する企画が出され、2000年、こちらが先に刊行されました。一方で、『西洋中世学入門』の方は長い時間がかかりましたが、それでもなんとか2005年に出版されました。実現までに10年以上かかったことになります。

こういった学生向け、若手研究者向けの入門書に加えて、僕の頭にあったのは西洋中世史研究者の学会の設立です。そのような学会の組織化については上の世代の先生がたから促され、必要だとは感じていましたが、大変さが先にたつてとても手をつける気になりませんでした。自分では正直やりたくなかったんですね。だけど、入門書2つの出版が実現できた時、気分が高揚していたのだと思いますが、池上俊一さんと学会の組織化もやってみようか、今やらなければきっとこの先は体力的にも仕事のにも無理だろう、という話になり、設立に取り掛かりました。準備だけで5~6年かかり、本当に消耗しました。池上さんとは家族ぐるみの交流もあって月に2回ぐらい一緒にご飯を食べていたので、その時に学会の青写真について話し合いました。そして、準備委員会を作り、全国学会になるよう知恵を絞りました。最初は色々な反発もありましたが、池上さんと二人だからなんとか耐えられたのだと思います。国外に向けて英文雑誌も出せるような学会にしたいと思っていましたが、2017年にオンライン英文ジャーナル *Spicilegium* が刊行されました。このように、自分が日本に戻ってきたときに考えていたことはほぼ実現できたのではないかと思っています。もちろん、いうまでもなく、2つの入門書の刊行と学会の設立は多くの同僚の協力がなければ実現できないことでした。

他方で、大学での教育や授業に関しては、自分が思うように行うことができました。すべての授業について言えますが、事前に作成したシラバス通りに授業を進めつつ、基本は、学生が自分で主体的に勉強するように工夫しました。特に演習の場合は、テーマや課題、材料は私が準備したり決めたりするけれど、実際に勉強して発表したり議論したりするのは参加する学生の役目であり、できるだけ彼らの自由にしてもらうことにしました。このやり方は、自分ではうまくいったと思っています。授業にはいろんな分野の学生が参加してくれましたし、私自身にとっても勉強になりました。かつて私が日本で受けていた外国語の講読という演習のスタイルは、アメリカの大学院教育を受けた後では採用することができませんでした。また、自分の専門や関心に限定したテーマの授業をすることもできませんでした。それぞれの学生が、自分の好きなテーマを自分で選び報告し、私自身はそれに対してアドバイスする役割を担いたいと思ったのです。

私のエール大学大学院での指導教授は John Boswell¹⁴でしたが、学生である私の関心や専門性を尊重してくれていました。シチリアのことは Hiroshi が1番よく知っているから、と言って私にシチリアの研究者としての発言を促してくれることがよくありました。そのような教育を受けることができてよかったと思っていますので、私も

¹³ 佐藤彰一・池上俊一・高山博編『西洋中世史研究入門』2000年、名古屋大学出版会。

¹⁴ John Eastburn Boswell (1947-1994): アメリカの歴史学者。エール大学で教鞭を取り、中世史・およびセクシャリティの歴史において先駆的な研究成果を残す。日本語で翻訳されたものとして代表的な著作は次のものがある: 大越愛子・下田立行訳『キリスト教と同性愛』国文社、1990年。

大学院の授業や大学院生たちとの関係では、同じことを実践しようとしてきました。このやり方は30年間変わっていません。変わったのは先ほど述べたように、おそらく、私自身の学生たちへの接し方です。それに、学生たち自身が工夫して授業のやり方を変えていったということもあります。特に、大学院や教養学部のゼミでは、学生たちが主体的に、より効率良く進められるように授業のやり方を変えていきました。

柴田：なるほど、僕は西洋史のゼミしかわかりませんが、学生の多様な関心というのも、環境が整って各自で調べるためのツールなどが充実したことと結びついているのだらうと思います。一方で、研究のスタンスの点で一貫した基準が保たれて授業が行われてきたというのは、先輩方を見るとよくわかります。

続けて社会の中での西洋史学の位置付けについてお聞きしてもよろしいでしょうか。先生はテレビ講座のお仕事などにも関わられ、国の方にも我々の研究というものを示してこられました。どのようなお考えを持ってこうしたお仕事に取り組んでこられましたか。

高山：テレビ・ラジオで行っていた仕事としては、一つは放送大学がありますね。これは樺山紘一先生が以前授業をされており、伊藤貞夫先生も退官後に放送大学教授になられていたので、先生がたの企画された講義に参加させていただきました。のちには私自身が客員教授として講義をもつようになりました。対面での授業ではありませんが、広く多くの視聴者に西洋中世史、地中海中世史の講義を提供していたということです。

NHK で出演した番組について言えば、当時地中海が注目されていたこともあって、シチリアに日本の人々の関心が向いてきていたんだと思います。2000年にNHKのBSがデジタル化したこともあって、3日間ぶっ通しで地中海に関する三元生中継番組「ミレニアム中継：『地中海』」が放送されました¹⁵。それに参加したのが最初だったように思います。僕も好奇心があり、ロケでイタリアに行けるということもあって参加させていただきました。その後、ハンチントンの『文明の衝突』¹⁶が注目を浴びていたこともあって、NHK スペシャル枠で8回シリーズの『文明の道』¹⁷という歴史ドキュメンタリー番組が制作されました。その番組のプロデューサーから、ヨーロッパや地中海に関連して、この「文明の道」シリーズにふさわしいテーマは何かないかと相談されたんです。それでフリードリヒ2世の十字軍のことを話したら、このテーマで番組を作りたいということになり、僕も携わることになりました。さらに、NHK教育テレビの「NHK人間講座」¹⁸で「文明共存の道を求めて」（全8回）を講義することになりました。最初は、グローバリゼーションについて話すつもりでしたが、シチリアのことも話して

¹⁵ NHK BS2・BS3 「ミレニアム中継：『地中海』」2000年12月1日～12月3日放送。

¹⁶ サミュエル・ハンチントン著／鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998年。

(原著：Samuel P. Huntington, *The clash of civilizations and the remaking of world order*, Simon & Schuster, New York, 1996.)

¹⁷ 番組テキスト：NHK「文明の道」プロジェクト『NHK スペシャル文明の道 (4)イスラムと十字軍』、NHK出版、2004年。

¹⁸ 番組テキスト：高山博『文明共存の道を求めて<NHK人間講座>』2003年、NHK出版、2003年。

URL：<https://www.nhk-book.co.jp/detail/000061890922003.html> (last accessed 2022.04.03.)

くださいという要望があり、半分ぐらいはシチリアの話をするようになりました。当時は私も若くて好奇心が旺盛でしたから、面白く楽しい経験でした。その後のNHK高校講座「世界史」¹⁹については、山内昌之先生からの紹介だったように記憶しています。

学術・研究支援の仕事としては、日本学術振興会の仕事がありました。皆さんは知らないかもしれないけれど、「21世紀COE」²⁰という巨大国家プロジェクトが2002年に開始されることになり、その審査を行うことになりました。全国の有望な大学のほとんどが申請した巨大プロジェクトの採択から、中間審査、成果の審査までほぼ5年間携わりました。同じ頃、日本学術振興会には、学術支援や科学研究費などを検討する「学術システム研究センター」が作られ、2004年から2007年までその研究員を2期務めることになりました。日本学術振興会の改善・運営や今後の方針などを検討する重要で大変な仕事でしたけれど、私なりに貢献できたのではないかと思います。その後、2008年から2012年まで、文科省の科学官という職を2期4年務めました。これは、文科省の視点から国や大学の研究の方向性を俯瞰するアドバイザー的な役割を果たす職でしたが、制度の改善や教育・学問の国際競争力の向上のための議論を重ねました。

柴田：ありがとうございます。最後にお聞きしたいのは、今後の人文学・西洋史学のことで。昨今はオンライン化が急速に進んで、国際的な交流も史料収集も地理にしばられず、日本に留まっても可能になってきています。もちろん肌で感じるという経験はできませんが、ある程度研究者として地歩を固めている人であれば、オンライン主体の活動でもさほど問題はないかもしれません。また、先生からも、中世学者の国際的な多様化というお話やゼミ生の間で効率化が進んでいるというお話がありました。グローバル化・多様性・効率といった言葉で近年の変化は捉えられると思いますが、これは先生が『ハード・アカデミズムの時代』で述べたことが一気に到来した状況かと思えます。先生は日本の西洋史学の現状や今後についてどのような考えをお持ちでしょうか。

高山：まず、日本の大学の西洋史学研究室の将来像ということ言えば、これからは近代国家という区切り方・枠組みは崩れていくでしょう。大学のポストのうち西洋史が残るとすれば、文学で比較文学が盛んになっているように、「比較」の名でフランスやドイツもやって、複数の地域を比較するというかたちになっていく。いままでは、西洋史の教員は「イギリス史」「ドイツ史」という区切りでポストが置かれてきたけれど、このような区切りはなくなっていくでしょう。学生が魅力的に感じるような別の切り口を見つけなければ、東京大学にかぎらず、日本の大学でのポストは減っていくことになると思います。

柴田：社会的に人文学への関心が低くなっている傾向にあると思いますが、このような流れに抵抗していくことも必要になってくるのでしょうか。

¹⁹ 番組テキスト：NHK高校講座『世界史 2005年度』NHK出版、2005年；NHK高校講座『世界史 2006年度』NHK出版、2006年。

²⁰ 2001年の文部科学省が公表した「大学構造改革の方針」に基づき、2002年から開始されたプログラム。詳細は以下のURLを参照：<https://www.jsps.go.jp/j-21coe/>

高山：そうですね。やはり工夫が必要で、例えば哲学や教養教育などの分野では関心が高まったり回復してきたりしているようにみえます。私たちが生きていくうえで歴史学がいかに重要であり、有益な指針を与えてくれるものであるかを、説得的に提示していく必要があるのではないかと思います。

柴田：発信の仕方を考えるべきということですね。

高山：そうですね。やはり、趣味ではなく、仕事として給料をもらうのであれば、発信の仕方も工夫しなくてはならないでしょう。みなさんにはいつも言っていることですが、自分の研究が我々にとっていかに重要なのか、この我々というのは自分 1 人じゃなくて現代社会にいかに重要なのかということですが、それを説得的に伝えられなければ、そのような研究はいらないと判断されてしまうということだと思います。

柴田：そうですね。ありがとうございました。

参加者からのご質問：若手研究者の課題

奥田：柴田さん、高山先生ありがとうございました。他に質問のある方はいらっしゃいますか。

内川：柴田くんの質問に関連して、より限定的な問題について伺わせてください。日本の歴史教育に関することなのですが、昨今高校の教育課程が変わって、世界史が必修ではなくなる代わりに「歴史総合」という近現代以降を学ぶ内容に移りました。一応「歴史探究」という科目で前近代も扱いますが、おそらくこちらを選択する学校は非常に少数、あっても一部の進学校に限られるだろうと思います。このような状況だと、この先は前近代の世界史をほぼ知らない大学生が多数という、僕個人としては恐ろしい状況になると思います。このような変化は日本の西洋史にどのような影響を与えとお考えですか。

高山：まず間違いなく、前近代史の教員ポストが減ると予想されます。いまの若手研究者にとって重要なことは、専門領域を一つの時代・地域に限定することなく、複数の時代・地域の教育ができるように準備しておくことだと思います。また、学生が関心を持つようなテーマ・枠組みを提示することも大事だと思います。関心を持つ学生が多ければ、そのための教員ポストが必要なのは当然のことですから。

内川：今までは高校の世界史の授業が、多少なりとも大学への橋渡しの役を担ってきたと思います。今後はそれすらなくなれば、学生が興味を持つきっかけすら無くなるのではないのでしょうか。

柴田：西洋史学を受容する母体そのものがなくなりますよね。

高山：これは仕方がないと言うか、すぐには止めようがないでしょうね。日本だけでなく欧米も同じような傾向にあります。

柴田：出版が社会に発信する 1 つの手段なわけですが、これからは高校生など若い人たちが手に取りやすいものを準備するという配慮がより必要になりますね。

高山：研究者の集団として必要なのはそういうことだと思います。中世史がいかに大事で我々

に示唆を与えるものであるかを伝えていく努力をするしかありません。

内川：今回の話を聞いていると、学界の中では近代国家にこだわっても意味がない、という認識が共有されてきているようにも思います。しかし一般社会では近代以降だけ学べば良い、という潮流になっているのは学界の動向と逆行しているように思えます。この学界の危機感と一般の方向性が相反している状況を、先生はどのようにお考えですか。

高山：私は古代・中世をきちんと学ぶべきだと思っています。そうしなければわからないものがたくさんあるから。残念ながら、今の状況を私が変えられるわけではないから、自分にできることをやるしかありません。私にできることは、自分の書いたもので研究対象の面白さや重要性、現代世界への示唆を知っていただくことかなと思っています。

内川：先生はここ数十年の学界の構造を変えてこられました。今後のフィールドとしては一般社会へ向けて広く語りかけていく、という方向性があるということですね。

高山：そうですね。以前にも話したと思うけれど、例えば YouTube を使って広く一般の人たちに、現代世界を理解するための視点や、過去と比較した現代の特徴を伝えることを考えてみたりしています。ただ、自分の時間も有限だから、残りの時間をどう使うのかは悩みどころですね。これからじっくり考えてみます。

作成・協力（インタビュー実施時点）

作成：奥田弦希（東京大学大学院人文社会系研究科 西洋史学専門分野博士課程）

山口陽子（東京大学大学院人文社会系研究科 西洋史学専門分野博士課程）

協力：高山博（東京大学文学部／大学院人文社会系研究科 西洋史学研究室 教授）

柴田隆功（東京大学大学院人文社会系研究科 西洋史学専門分野博士課程／ボン大学文学部
歴史学科博士課程）

内川勇太（青山学院大学非常勤講師）

※一部誤字・脱字がありましたので、訂正いたしました(5/20)

※一部誤字・脱字がありましたので、改めて訂正いたしました(5/22)